潟語り（十八）

文・小西一三
絵・小西由紀子

潟の漁と出稼ぎ その①

現在の神明町は、かつて水田だった一帯を埋めたてできた町。鎌田健蔵さん（七三）、エイ子さん夫婦は昭和二十八年に結婚し、その頃からこの地区に住み、さまざまな仕事をしてきました。健蔵さんは今でも海に出る現役の漁師さん。潟と海の漁についてうかがいました。

シジミ獲りは「腰っ引き」だった

親父も潟の漁師だったから、俺も十六歳の頃から潟の漁に出るようになった。当時の漁師は食うだけで精いっぱい。んだもんだから、俺も北海道に出稼ぎに行くようになった。天王出身の児玉さんという方がやっていた釧路の「石炭こううん」という職場だった。六、七年も行ってたべな。出稼ぎを止めてからまた潟で漁師をやった。

干拓前の潟は、かなり遠浅でな。今の防潮水門の辺りなど、胴長のままでかなり沖まで行げだもんだった。だがらシジミ獲りなど船は使わねで人間が直接、引っぱったもんだ。「腰っ引き」って言ったな。腰にベルトを回わして、棒を動かしながら後ろ向きに進む。ベルトが腰に食い込むもんだから、腰には綿入れを巻いでな。冬の吹雪の日でも潟の中に入って引っぱった。午前中いっぱい引っぱって、午後からは「通し」を使って選別だ。いぐやったもんだな……。（健蔵さん）

結婚した頃、父さんは釧路に出稼ぎに行ってで、帰ってくるのは盆と正月だげ。私は父さんの本家の仕事を手伝ってたもんです。出稼ぎを止めて潟で漁をするようになってからは、シジミの選別もするようになった。今、四十二歳になる息子が二歳だった頃、その息子をおぶって選別したもんです。息子は私が動くもんだから「やめれー、やめれー」って背中で泣き続けるし、あの時は私も本当にやめでぐなったすな。そのうち干拓が始まり、父さんは干拓の現場で仕事をするようになった。（エイ子さん）